

文  
芸  
祭  
合  
同  
作  
品  
集





## ごあいさつ

けんみん文化祭ひろしま実行委員会

会長 湯崎 英彦

「けんみん文化祭ひろしま」は、県民の皆様の文化活動の発表、鑑賞、交流の場として毎年開催しており、今回で33回目を迎えます。

本県では、県民の皆様一人一人が、「安心」の土台と「誇り」により夢や希望へ「挑戦」することで、それぞれの欲張りなライフスタイルを実現できるよう、さまざまな取組を進めており、「けんみん文化祭ひろしま」もその一つとして魅力のある「祭」となるよう、取り組んでおります。

新型コロナウイルスの感染拡大が始まって以来、本祭典におきましても、感染状況に応じた適時適切な対応を講じているところであり、このような中、昨年度に引き続き「けんみん文化祭ひろしま22文芸祭」を開催できますことは大変意義深く、大きな慶びでございます。開催に当たり、多大な御尽力を賜りました関係の皆様には、深く謝意を表します。

本年の文芸祭にも、多くの県民の皆様から一〇、三七七点の文芸作品を御応募いただきましたことに深く感謝申し上げます。栄えある各賞を受賞されました皆様には、心からお祝いを申し上げます。

本文芸祭が皆様の創作活動の励みとなり、一人でも多くの方々に、様々な思いを言葉に綴る楽しさを実感していただき、文芸への理解を深める契機となれば幸いです。どうか、皆様には、本県における芸術・文化の発展に、引き続きお力添えを賜りますようお願い申し上げます。ごあいさついたします。



目次

短歌

小・中・高校生の部……………8  
一般の部……………22

俳句

小・中・高校生の部……………38  
一般の部……………52

現代詩

小・中・高校生の部……………68  
一般の部……………100

川柳

小・中学生の部……………140  
高校生・一般の部……………148

作品募集要項……………158

応募状況……………160

大会記録……………161



短  
歌

選  
者

堀 新 石  
内 宅 原  
孝 道 豊  
子 和 子

## 小・中・高校生の部

入賞

広島県知事賞

振り返る祖母がいたはず台所二月のあの日時が止まった

県立三原高等学校一年 浅海 花菜

広島県議会議長賞

閉じられる学校最後の卒業生私一人が送られて行く

庄原市立庄原中学校二年 土居 穂香

広島県教育委員会賞

鏡にはうらの自分をかくせずにぼくを見ている鏡のぼくが

庄原市立高野小学校五年 馬船 清太

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

「先輩」と呼び止められてゆつくりと嬉しさ隠して振り向く私

広島市立井口中学校二年 福田 真夕

広島市長賞

さつそうとえさを運ぶよ親ツバメ日増しにふくらむ五羽の子ツバメ

呉市立川尻中学校二年 笠岡 千尋

広島市議会議長賞

追いつけないあの子のピッチとストライドいつか自分が背中を見せる

広島市立庚午中学校二年 木村 仁海

広島市教育委員会賞

ひりひりだぬればよかったひやけどめママもひりひりさんだるのあと

庄原市立東小学校一年 山岡 弥緒

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事賞

日光がナイフのように尖る夏日陰を渡る私はくくのいちノ一

呉市立仁方中学校三年 竹内 絢音

石原 豊子 選

特 選

振り返る祖母がいたはず台所二月のあの日時が止まった

県立三原高等学校一年 浅海 花菜

【評】祖母が亡くなったことを思わせる「二月のあの日時が止まった」の下の句に祖母を偲ぶ強い気持ちを感じさせる。

核兵器どうしてあるの考えて君の今より僕らの未来

福山市立城北中学校一年 新田 暁

【評】核兵器をちらつかせる不安な報に、「君の今より僕らの未来」と警告鐘を鳴らしている歌である。

鏡にはうらの自分をかくせずにぼくを見ている鏡のぼくが

庄原市立高野小学校五年 馬船 清太

【評】思春期によく見るであろう鏡。その鏡は姿形だけでなく、心の中までも写しているかのよう。悩み多いこの時期の思い。

放課後の楽器演奏にじむ汗ふと上見やれば雲の峰立つ

県立千代田高等学校二年 郷田 ひな

【評】 放課後の音楽クラブの練習中、ふと窓外を見れば積乱雲が。「雲の峰立つ」の結句の表現が効いている。

「先輩」と呼び止められてゆつくりと嬉しさ隠して振り向く私

広島市立井口中学校二年 福田 真夕

【評】 三句と四句の「ゆつくりと嬉しさ隠して」の表現に、「先輩」に「先輩」として見せる心の余裕を感じさせる歌。

亡き祖母や葬式終わり次の朝祖母を想って零れる涙

福山市立松永中学校三年 岡田 大輝

閉じられる学校最後の卒業生一人が送られて行く

庄原市立庄原中学校二年 土居 穂香

盆の夜に返事は来ないと知りつつも亡き祖母思ひ声をかけけり

県立呉宮原高等学校二年 清水 美羽

卒業式明日も食べたいたまご焼きこれが最後の母の弁当

県立広島皆実高等学校三年 松本 修己

わすれない伝え続けてこれからも残し続ける原爆ドーム

福山市立城北中学校三年 前原 慧汰

朝が来てご飯を食べてまた眠る平和なことに気づかない今

県立尾道北高等学校一年 富士谷咲奈

忘れるな八月六日の広島忌知らなくなりゆく本当の怖さ

県立尾道北高等学校一年 岡野 大基

セミが鳴くあの日の悲惨さ思い出す被爆アオギリ真実を知る

広島市立井口中学校二年 藤井ゆいり

一日の楽しいくらしのありがたさ思い知らされるウクライナの都市

呉市立蒲刈小学校五年 大倉 綾仁

向島も尾道も平和ウクライナに住んでる子たちの毎日を思う

尾道市立向東小学校五年 佐藤 一翔

蝉声<sup>せんせい</sup>が耳に響いた帰り道どこか懐かし真夏のおい

広島市立戸山中学校二年 桑田 眺良

レース前心拍数が上がってく笛の合図で飛び込む一瞬

広島市立庚午中学校二年 田中 千陽

緊張で手に汗握る試合前勝ちにこだわる自分のステージ

県立広島皆実高等学校一年 坂本 華蓮

早朝に海面で光る小鰯の白銀の腹身を隠す

県立三原高等学校一年 仁田 想己

さっそうとえさを運ぶよ親ツバメ日増しにふくらむ五羽の子ツバメ

呉市立川尻中学校二年 笠岡 千尋

けもの道囲む自然の葉も落ちて秋の終わりを告げる木々

福山市立城北中学校三年 中島 里彩

オレンジにそまりし海をながめつつ虫の声きき秋はもうすぐ

県立尾道北高等学校一年 野田 耕平

空に咲く大輪の花ながめつつ楽しき休みの終わりを思う

県立尾道北高等学校一年 大川 陽香

指先と櫛に絡んだ髪すいてポニーテールの夏が始まる

県立広島皆実高等学校二年 佐藤みころ

おるすばんれんしゅうしてるなつやすみすこしだけならできるきがする

庄原市立東小学校一年 浅井 幸芽

新宅 道和 選

特 選

日光がナイフのように尖る夏日陰を渡る私はくくのいち一

呉市立仁方中学校三年 竹内 絢音

【評】 厳しい日差しを「ナイフのように尖る」と詠んだ。日差しを避けて日陰を歩くことから忍者を連想したのも巧み。

幕上がりラの音重なるチューニング音の世界へ引き込む魔法

広島市立庚午中学校二年 藤井 春乃

【評】 指揮者登場の拍手が鳴りやみ、オーケストラの音合わせの情景を「魔法」と詠んだ。期待に満ちた緊迫感が伝わる。

追いつけないあの子のピッチとストライドいつか自分が背中を見せる

広島市立庚午中学校二年 木村 仁海

【評】 多くの部活の短歌の中、「ピッチと〜」「背中を〜」と具体的に詠んだことでイキイキした短歌になった。

おひさまがびかびかびかりミニトマトあかいしんじゅのネックレスみたい

庄原市立東小学校一年 田原 結衣

【評】ツヤツヤ光るミニトマトを「あかいしんじゅの〜」と詠んだ。「びかびかびかり」のオノマトペも楽しい。

ひりひりだぬればよかったひやけどめママもひりひりさんだるのあと

庄原市立東小学校一年 山岡 弥緒

【評】自分の日焼けから母の日焼けへ。作者は日焼けを免れて白いままの母のサンダルの跡をズーミングし切り取って見せた。

友達に抱いてしまった恋心仲良くいたい思いを隠す

県立三原高等学校一年 桃谷 諒太

帰り道見慣れた姿振り返る微笑む君に恋をしたんだ

福山市立誠之中学校二年 屋方 夢乃

あなたから返信くるのは嬉しいよでも「おK」だけはさすがにきつい

広島市立瀬野川中学校二年 亀永 優月

指先と櫛に絡んだ髪すいてポニーテールの夏が始まる

県立広島皆実高等学校二年 佐藤みころ

「先輩」と呼び止められてゆっくりと嬉しさ隠して振り向く私

広島市立井口中学校二年 福田 真夕

鏡にはうらの自分をかくせずにぼくを見ている鏡のぼくが

庄原市立高野小学校五年 馬舩 清太

コロナ禍で制限された夏休みこれも意外と慣れてしまった

県立三原高等学校二年 福村 愛結

念願の修学旅行小雨降り気圧は低く気分は高く

庄原市立庄原中学校二年 松代 笑佳

閉じられる学校最後の卒業生私一人が送られて行く

庄原市立庄原中学校二年 土居 穂香

たのしみは妹と初夏にベランダのブルーベリーを二人で摘む時

広島市立己斐小学校六年 津田 深遥

ドキドキは親におこられすねていた妹の目がこつちを見る時

広島市立己斐小学校六年 柳川 心

いもうとがとことこあるくぼくのあとおとうともきてゆかいなこうしん

庄原市立東小学校二年 佐々木雄大

桜の木ピンクのかさに見えてくる雨がふったら使ってみたい

庄原市立高野小学校五年 伊達 美桜

振り返る祖母がいたはず台所二月のあの日時が止まった

県立三原高等学校一年 浅海 花菜

いきたいなおばあちゃんたちあいたいなころなころころころがっていけ

庄原市立東小学校一年 庵原 誠心

夏休み少し涼しい早朝はひいばあちゃんの家香りだ

庄原市立庄原中学校二年 三上 知夏

おるすばんれんしゅうしてるなつやすみすこしだけならできるきがする

庄原市立東小学校一年 浅井 幸芽

戦争に環境問題感染症授業で予習はしたはずなのに

県立三原高等学校二年 三輪 優大

手をあげる私を見ている運転手お礼したくて高く手を振る

庄原市立庄原中学校二年 新井 梓

よく鳴いて綿毛のような雑種猫手の平に乗る小さな命

庄原市立庄原中学校二年 山口小友季

堀内 孝子 選

特  
選

閉じられる学校最後の卒業生一人が送られて行く

庄原市立庄原中学校二年 土居 穂香

【評】最後の卒業生は自分ひとり。学校も廃校になるといふ。多くの思い出と淋しい気持ち伝わってくる。

さつそうとえさを運ぶよ親ツバメ日増しにふくらむ五羽の子ツバメ

呉市立川尻中学校二年 笠岡 千尋

【評】ツバメの様子をよく観察している。動物に心を寄せ、成長していく様子が嬉しく感じられる。

悲しげにひびくなき声おりの中母と訪ねたピースワンコ

庄原市立庄原中学校二年 清水 雫愛来

【評】保護犬だろうか。おりの中で悲しそうに鳴いている犬。動物を思いやる優しい気持ち伝わってくる。

わあすごいつのがちんとなげとばすかぶとむしのひっさつわざだ

庄原市立東小学校二年 秋山 恵愛

【評】かぶと虫が戦かっているのを見て、感動した様子が生き生きと表現されている。ワクワク感がある歌。

しまなみの海に浮かんだ島々と夕日が重なる秋のキャンバス

盈進中学校二年 田中 拓磨

【評】夕日が瀬戸の島々を染めながら、広がっている。まるで絵画を見ているようで情景が浮かんでくる。

入 選

核兵器どうしてあるの考えて君の今より僕らの未来

福山市立城北中学校一年 新田 暁

新学期不安だったのが嘘みたいここのクラスでほんとに良かった

福山市立誠之中学校二年 磯崎 結真

鏡にはうらの自分をかくせずつぼくを見ている鏡のぼくが

庄原市立高野小学校五年 馬船 清太

日光がナイフのように尖る夏日陰を渡る私はくくのいち

呉市立仁方中学校三年 竹内 絢音

いつもより大きく見える満月が黒い紙から切り取ったみたい

呉市立広中央中学校二年 井上 結菜

工事後の生物のいない川を見てこいしくなった昔の川が

廿日市立大野中学校二年 下瀬 遥斗

風りんのやさしい音色が耳ささやく小風ではしゃぐ子どものように

三次市立八次小学校四年 中村 杏子

コロナ禍でみんなの笑顔みれるのはマスク外せる体育の時

三次市立作木中学校二年 志摩 萌花

春風が桜花びらちりばめて道に落ちゆく命のかげら

比治山女子中学校三年 畑中 愛菜

全員が静まり見つめたその先に大きなアーチをえがく白球

呉市立呉高等学校三年 川内 龍哉

空高く打ち上げられる夏模様夜の沼田川光輝く

県立尾道北高等学校一年 砂原 彩葵

春の朝南部大会九人であふれる勝利こぼれる笑顔

三原市立久井中学校二年 樋口 沙那

いもうととばばといっしょにかくれんぼてれびのよこでじつとしてたよ

三次市立粟屋小学校二年 下奥 彩華

あかちゃんがうまれたんだよおんなの子六人きようだいにぎやかなんだ

庄原市立高野小学校二年 向田翔太郎

雛の子が翼を広げ巣立ちするまだ見ぬ未来へ大きくはばたく

廿日市市立大野中学校二年 永田ゆうき

一日の楽しいくらしのありがたさ思い知らされるウクライナの都市

呉市立蒲刈小学校五年 大倉 綾仁

あじさいの咲く季節には雨がふるポロポロひびくハープのように

尾道市立向東小学校五年 伊藤 碧

ドローン飛ぶトンボのように舞う姿空を見上げた理科室の僕

呉青山中学校二年 北岡 春樹

夜の町祭さわぎの人の声うち消す空にたくさんの花

府中市立上下中学校二年 川上 日斗

海開き水面かがやきすきとおるゴーグルごしに魚たくさん

三次市立八次小学校六年 二重 和真

## 一般の部

### 入賞

広島県知事賞

よるべなき御霊もあろうヒロシマの至る所に遺霊碑あれど

広島市 加土 道子

広島県議会議長賞

抗ガン剤治療始まる我が娘抜ける運命さだめの髪を結いやる

広島市 山口 順子

広島県教育委員会賞

ひと夜かけ窓の下まで来し蟬か足搔あがくかたちのままなる骸むくろ

福山市 若林美知恵

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

九十五の姉健やかを恃みとし今日山畑に大根を播く

世羅郡世羅町 高本 澄江

広島市長賞

廃校にIT企業が出店す老いで賑わうスマホ教室

竹原市 入駒 智子

広島市議会議長賞

八月六日の猿猴川の貝堀りは祖母に諭され川へもどしぬ

安芸高田市 井上 愛

広島市教育委員会賞

戦争の映像続く日々の中つばめは三羽の雛を育む

三原市 小白 照子

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

被爆死の妻の髪留さがしあて十日の後に伯父も逝きたり

三次市 堂本 明美

石原 豊子 選

特選

よるべなき御霊もあろうヒロシマの至る所に遺霊碑あれど

広島市 加土 道子

【評】ヒロシマの原爆で亡くなった方々へ寄せる想いが、下の句の「至る所に慰霊碑あれど」に表現された深みのある歌。

抗ガン剤治療始まる我が娘抜ける運命さだめの髪を結いやる

広島市 山口 順子

【評】癌治療を続けておられる娘さんへの親のやるせない気持ちと愛情が、下の句に表現されている切ない歌である。

九十五の姉健やかを恃みとし今日山畑に大根を播く

世羅郡世羅町 高本 澄江

【評】九十五歳の高齢の元気な姉を思いやり、その元気を「今日山畑に大根を播く」と写実的に表現しているところが良い。

ひと夜かけ窓の下まで来し蟬か足搔くかたちのままなる骸

福山市 若林美知恵

【評】蟬の短い一生に思いを寄せる作者。「ひと夜かけ窓の下まで来し蟬か」に作者の温かい思いが伝わる。

戦争の映像続く日々の中つばめは三羽の雛を育む

三原市 小白 照子

【評】上の句と下の句で人間の愚かさ、燕など他の生き物の変わらぬ命の営みを比較し、人間への警鐘を鳴らしている。

切り干しの封を開ければ陽の匂い祖母に抱かれし想いのすなる

尾道市 若住 瑞枝

待ちこがる今や遅しとほととぎす卯の花かげに亡き息子こ偲こばゆ

呉市 石田 操子

亡き義父が挿して増やせし紫陽花が今年も墓所を青くいろどる

広島市 岡田 寿子

クチナシの甘い香りに包まれて父の法要無事に終わりぬ

山県郡北広島町 出本 恵子

母の瞳めは戦死の父を想うとき光届かぬ湖底を映す

庄原市 古家八千代

ウクライナ人事でなし大国が家に土足で踏み入る恐怖

三次市 林 章子

ハルビンを発つ夜の雨かかる日に逃げ場もあらず行列を組む

広島市 中垣 悦子

言葉なく荒れたる手指をわれに見せ妻はおもむろに厨に入る

尾道市 川口 靖文

「せり迫り」にゐる権力は何時も纏ひるぬフェイク塗れの迷彩服を

広島市 大多和 義

原民喜の「夏の花」とう文読みてギラギラの破片読み返すなり

広島市 吉川 徳子

広島忌過ぎゆく時間語り継ぐ声なき声も枯らすことなく

被爆死の妻の髪留さがしあて十日の後に伯父も逝きたり

食べたいと胃瘦の夫に泣かれては乾いた口をゆつくりと拭く

施設にて兄と別るる時に言う「また来るね」今日納骨あとも

千光寺の鐘ゆるやかに尾をひきて恙無き身のひと日が暮れる

花曇り雑草の中ひっそりと小さきエビネ庭隅に咲く

蝉しぐれ空の色にも亡き人をしきりに想う八月を生く

ジャガ芋は雨の恵みを待ちまちて土盛り上がり命の息吹

隠された行間の想ひよむごとく目と目で話すマスク会話は

清盛の納めしという経塚のいとも古りたり馬酔木花咲く

広島市 松尾 信彦

三次市 堂本 明美

江田島市 住田 照水

呉市 田村美知子

尾道市 原田 道枝

広島市 東方田ナミ子

庄原市 松園 和子

広島市 兼池 隆子

広島市 森 ひなこ

廿日市市 齋藤 金二

新宅 道和 選

特選

喜びはガイド施し子が親となり子連れで歩む慰霊碑めぐり

広島市 田村 陽子

【評】ヒロシマの願いを踏みにじる核の恐怖が迫る昨今希望を与えてくれる短歌。「施し」は「せし」としたい。

八月六日の猿猴川の貝堀りは祖母に諭され川へもどしぬ

安芸高田市 井上 愛

【評】子供の頃お盆の魚釣りは祖母から止められていた。大勢の被爆者が水を求めて亡くなった猿猴川ならなおさら。

よるべなき御霊もあろうヒロシマの至る所に遺霊碑あれど

広島市 加土 道子

【評】原爆で亡くなり、遺骨の引き取り手のない方、亡くなったことも知られていない方々の御霊に心を寄せた。

十八歳ある日ボンと成人し何も変わらぬ日常をみた

廿日市市 野田友里恵

【評】十八歳成人の実感のなさを詠んだ。「ボン」が効いている。「ある朝ボンと」とすると字足らずが解消できる。

ハロウインの魔女ひとり乗せたバスがでる郊外線の早い終便

広島市 岩本 幸久

【評】乗客はハロウインパーティー帰りの疲れて眠る「魔女」ひとり。郊外の暗い夜道を走るバスの情景が伝わってくる。

廃校にIT企業が出店す老いで賑わうスマホ教室

この線路つたい逃れし人数多廃線の今語る人無く

稜線を真赤に焦がす陽に惑ふいくさなき世を祈る八月

七夕に今年も同じ願い事平凡でいい平和を祈る

明るくて優しい声に人は寄る私が一番寄っているはず

父母よりも夫と暮らした年月の長さそれでも古里恋し

ハルビンを発つ夜の雨かかる日に逃げ場もあらず行列を組む

エアコンのリモコン今日も奪い合う暑がりの父寒がりの母

食べたいと胃瘦の夫に泣かれては乾いた口をゆっくりと拭く

これ見てと甘藷かかげる園児らの夕日に映えて誇らしき顔

竹原市 入駒 智子

三次市 山本 圭子

三次市 林 勝子

庄原市 新宅 涼枝

呉市 喜多 省吾

広島市 岡田 郁枝

広島市 中垣 悦子

広島市 羽城 裕子

江田島市 住田 照水

広島市 三谷 俊明

九十五の姉健やかを待みとし今日山畑に大根を播く

世羅郡世羅町 高本 澄江

性格の表れ畝の直線にみるみる緑真直に並ぶ

福山市 高橋 泰子

産院の車の出入り多きなかお腹さすりて姪子<sup>めいご</sup>出て来る

廿日市市 金子貴佐子

植え替えもしてやれぬままクンシランわんぱくそうな蕾が揃う

尾道市 島谷 文恵

ドーム前電車を降りる足下を緑の草が萌えて歓迎

広島市 小西 博子

帰らじと泣いて家出る子の後姿に母は手を合わせおり

呉市 芳野 幸忠

きゅつとした蕾の徐々にほどけゆくどの瞬間も美しき芍薬

広島市 藤本智恵子

雪搔きのいらぬ土地へ父母の墓を移してコスモスの風

広島市 小都 妙子

言葉なく荒れたる手指をわれに見せ妻はおもむろに厨に入る

尾道市 川口 靖文

被爆死の妻の髪留さがしあて十日の後に伯父も逝きたり

三次市 堂本 明美

堀内 孝子 選

特  
選

抗ガン剤治療始まる我が娘抜ける運命の髪を結いやる

広島市 山口 順子

【評】抗ガン剤治療を受けられる娘さんを見守る作者。結句にやるせない  
思いと、回復を願う気持ちらが込められている。

廃校にIT企業が出店す老いで賑わうスマホ教室

竹原市 入駒 智子

【評】廃校の後を利用して出店したIT企業。住民もスマホ教室に通い、  
賑わう様子が伝わる楽しい歌。

被災してこの地に移り新しき終の棲家に望みを託す

広島市 岡本 洋美

【評】毎年どこかで起こる災害。被災してようやく落ちついた新しい土地  
で生きようとする希望が伝わってくる。

戦争の映像続く日々の中つばめは三羽の雛を育む

三原市 小白 照子

【評】日々伝えられるウクライナ状況。つばめの様子を見ながら、平和を願う気持ちが見とれる。

被爆死の妻の髪留さがしあて十日の後に伯父も逝きたり

三次市 堂本 明美

【評】幾万の人の命を奪った原爆。その焼け跡を必死で探すご家族。戦争の悲惨さと、空しい思いが伝わってくる。

サカスタの工場場に聳える鋼鉄の七基の鶴がドームと語らふ

三次市 磯井ふみ子

山村の深き緑に埋もれたる木造校舎幻となる

広島市 大澤 優子

ひと夜かけ窓の下まで来し蟬か足搔くかたちそのままなる骸

福山市 若林美知恵

母の瞳は戦死の父を想うとき光届かぬ湖底を映す

庄原市 古家八千代

歌いつつ身体全体バネにして幼は見せるキレキレダンス

安芸高田市 西山 千昭

ウクライナ黒き大地に向日葵は陽射しに向けて大地を掴む

呉市 中島 義夫

隠された行間の想ひよむごとく目と目で話すマスク会話は

広島市 森 ひなこ

施設にて兄と別るる時に言う「また来るね」今日納骨あとも

呉市 田村美知子

戦争はいつ終はるのか水槽の目のなき魚の前に佇む

安芸郡海田町 光岡 詔子

母さんとこの世の別れのはずなのにただ吸う息と吐く息僕は見つめて

竹原市 栄谷 和則

ひび割れた田圃に蛙は見あたらずそれでも鷺は降りてたたづむ

三次市 眞丸 利子

雪搔きのいらぬ土地へ父母の墓を移してコスモスの風

広島市 小都 妙子

食べたいと胃瘦の夫に泣かれては乾いた口をゆつくりと拭く

江田島市 住田 照水

この線路つたい逃れし人数多廃線の今語る人無く

三次市 山本 圭子

炭を焼く父と登りし所山ふる寺まもるしだれの桜

廿日市市 山田 宣昭

稜線を真赤に焦がす陽に惑ふいくさなき世を祈る八月

三次市 林 勝子

ウクライナ人事でなし大国が家に土足で踏み入る恐怖

三次市 林 章子

次々とホテル、マンション聳え立つ我が家はまるでビルの坪庭

広島市 小坂 修

プーチンは生まれ変わるかヒトラーの我欲のままに民殺戮す

福山市 井西 康治

父のぶん母の分をと原爆忌学徒の姉の六倍を生き

呉市 丹羽 多みこ



俳  
句

選  
者

広 木 川  
川 村 崎  
良 里 益  
子 風 太  
子 子 郎

## 小・中・高校生の部

入賞

広島県知事賞

今は亡き母のにおいの藺座布団

県立千代田高等学校二年 服部 純平

広島県議会議長賞

ゆつくりと季節を運ぶかたつむり

呉市立呉高等学校三年 中谷 美桜

広島県教育委員会賞

汗かいてペットボトルが軽くなる

県立三原高等学校二年 五阿味直斗

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

仏壇に林檎が香り祖父想う

呉市立川尻中学校三年 橋本 奈々

広島市長賞

船の外真上に光る天の川

県立三原高等学校一年 橋本 英明

広島市議会議長賞

益になり天から曾祖母帰省中

呉市立仁方中学校一年 宮口 陸翔

広島市教育委員会賞

面接に止まらぬ咳であせりだす

県立西条特別支援学校高等部二年 高崎 武

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

大プールながれるプール目がまわる

府中町立府中中央小学校四年 黒河心乃羽

川崎益太郎 選

特選

面接に止まらぬ咳であせりだす

県立西条特別支援学校高等部二年 高崎 武

【評】 コロナ禍で、人前で咳をすることは、極端に気を使う。まして、面接の席では、焦る気持は良く分かる。気の毒。

ぼくスイカまつすぐきたわもうだめだ

東広島市立河内小学校五年 兼田 楓大

【評】 スイカ割りを、スイカの立場に立つて捉えた斬新な句。棒を持った人が、まつすぐ来た。もう逃げられない。合掌。

向日葵が日光あびない反抗期

福山市立城北中学校二年 弘光 稔

【評】 向日葵は、日光が好きな花。その向日葵にも日光を浴びたくないという反抗期があるという面白い句である。

たいつったしたかみそうな手ごたえだ

府中町立府中央小学校四年 萱谷 直矢

【評】鯛を釣った時の喜びと緊張感を、舌をかみそうと感じた斬新な句。疑義はあるが、季語は「鯛」である。

聞き飽きたここが勝負だ夏休み

廿日市市立廿日市中学校三年 榎木 優彩

【評】夏休みが来る度に「ここが勝負だ」とハッパを掛けられて、耳にタコが出来たという、反抗期の句。面白い。

カブトムシよろいの中身未公開

坂町立横浜小学校六年 宮崎 友汰

流星よなぜお前だけ生き急ぐ

廿日市市立廿日市中学校三年 川手 悠雅

朝顔が見せる多彩な百面相

県立尾道北高等学校一年 亀田 健太

パンケーキぼくたちだけのおつきさま

府中町立府中央小学校二年 安森 丈翔

見上げれば空が着こなす雲の峰

東広島市立向陽中学校三年 杉山 千夏

ゆつくりと季節を運ぶかたつむり

呉市立呉高等学校三年 中谷 美桜

シャボン玉パチンと割れてどこいった

東広島市立向陽中学校三年 加藤 純一

神秘的二重の虹と晴れた空

県立呉宮原高等学校二年 岡田 桃琶

セミ騒ぐメスにとつては愛の歌

福山暁の星小学校六年 後藤 雄仁

額から涙が出るよ炎天下

県立三原高等学校二年 河田 莉奈

サングラス瞳の奥にいるあなた

県立広島皆実高等学校三年 横山 粹奈

ほうほたる命数尽きても照らさんか

安芸高田市立美土里中学校三年 岡崎 結愛

新緑や命のリレー引き継いで

尾道市立吉和小学校六年 松下 雅

思い出をぎゅっと詰めこむ夏休み

比治山女子中学校三年 井上由梨奈

美しき光放つや夏野菜

県立呉宮原高等学校二年 山方 来夢

君に言う勿忘草の花言葉

廿日市市立廿日市中学校三年 角田 弥音

たなばたさまねんにいちどのこいをした

府中町立府中央小学校二年 鐘江真緒里

カタツムリからの中にはかんそうき

府中町立府中小学校四年 藤田 彬義

しゃぼん玉割れそうなまま親離れ

福山市立城北中学校二年 橘 玲也

何色のドレスにしようかき氷

坂町立横浜小学校六年 山重 心乃

木村里風子 選

特選

今は亡き母のにおいの藺座布団

県立千代田高等学校二年 服部 純平

【評】 藺草で編んだ座布団は冷たく気持のよいもの。母が好んで使っていたのである。今は母を偲び使っているのである。

特攻のこの海見れば父の顔

呉市立川尻中学校三年 渡邊 光祿

【評】 先の大戦末期は人間が兵器もろとも突入した。南海で戦死した父、海を見ると悲しくも尊い生命を感じた。

久しぶり亡き祖父に会う夏休み

県立三原高等学校二年 内田 遥斗

【評】 祖父と会う。亡き祖父との絆が深いのである。

ゆつくりと季節を運ぶかたつむり

呉市立呉高等学校三年 中谷 美桜

【評】 かたつむりの歩みから季節を感じた感性の豊かさ。

益になり天から曾祖母帰省中

呉市立仁方中学校一年 宮口 陸翔

【評】 思いつきがよい。奇知に富んだ発想が帰省中である。迎え益で先祖を迎える。曾祖母も急いでいるであろう。

入  
選

汗かいてペットボトルが軽くなる

県立三原高等学校二年 五阿味直斗

茜の陽海に沈みし光と影

県立広島皆実高等学校二年 難波 日和

まっしろなスニーカーが春を呼ぶ

広島市立三和中学校三年 岡田 瑞希

金魚すくい鼻緒の痛み気にとめぬ

広島市立三和中学校三年 西本 紗雪

仏壇に林檎が香り祖父想う

呉市立川尻中学校三年 橋本 奈々

自分でね育てたトマト世界一

廿日市市立佐方小学校四年 極楽寺悠大

紅葉はまさに神秘のグラデーション

廿日市市立佐方小学校五年 溝越 颯明

竹の子は親の近くに立っている

廿日市市立佐方小学校六年 後藤 順太

つゆ草がかぜにあたっておどつた

府中町立府中小学校二年 金子 治基

はすの花水面うつつてきれいだな

府中町立府中小学校三年 長井優理名

かたつむり大雨の中動いてる

府中町立府中小学校四年 高山 圭祐

咲きほこるアジサイの花雨もよう

府中町立府中小学校四年 實光 華音

帰り道足もとにさくスミレかな

府中町立府中小学校四年 篠本 花歩

満月はなぜ丸いのか不思議だな

府中町立府中小学校五年 兵頭 佑飛

赤い海秋の夕日が写ってる

府中町立府中小学校六年 別府 ころ

森の中涼める音は滝の音

府中町立府中小学校六年 井上 雄斗

日やけはね夏のおはだの衣がえ

府中町立府中小学校五年 矢田 絢音

山の中自然の匂い風薫る

福山市立誠之中学校三年 坂本 真海

広川 良子 選

特  
選

大プールながれるプール目がまわる

府中町立府中央小学校四年 黒河心乃羽

【評】プールにも色々のしかけがある。目のまわるほど流れの早いプールのスリルを十分たのしんだのだ。

ひまわりはわたしのしんちようおいこした

庄原市立東小学校一年 恵崎 美音

【評】だいに育ててきたひまわりが、自分の背たけより高くのびた。その成長をよろこんで見上げ満足している。

船の外真上に光る天の川

県立三原高等学校一年 橋本 英明

【評】真つ暗い夜の海に出て、船上から見上げた天の川はさぞきれいに輝やっていたことでしょう。

青空の下で打ち合う水鉄砲

福山市立誠之中学校三年 井上 愛咲

【評】青空の下で水鉄砲を打ち合う健康的な子ども。元気いっぱいにはしゃいで打ち合う声が聞こえてくる。

満開のさくらとともにスタートだ

府中町立府中小学校四年 堀江 采葉

【評】さくらの花が咲いた。人の心も晴れやかでよるこびと希望にみちた明日がある。

かみなりがごろごろおこってる

庄原市立高野小学校一年 小沼菜々海

空蟬をいまつつみたる幼き手

廿日市市立廿日市中学校三年 中尾 朱里

なめくじも野さいをたべるくいしんぼう

府中町立府中央小学校二年 妹尾 侑奈

ゆうだちやほっとするかおみなおなじ

福山暁の星小学校三年 神原 佳澄

風車父にせ負われ回す子よ

廿日市市立佐方小学校四年 梶川 修

あさがおを一年生がそだててる

府中町立府中小学校二年 森 奏登

風鈴のささやく音は波の音

府中町立府中小学校六年 新川 翔空

消しゴムがとけるほどの真夏日に

呉市立蒲刈中学校三年 竹内 海登

授業中見上げた空は鯛雲

庄原市立西城中学校一年 加藤 和寿

猛獣の澄む目に映る西日かな

広島市立瀬野川中学校三年 児玉 健人

宮島の入道雲が窓の中

広島市立瀬野川中学校三年 宮崎 樹

眠れぬ夜昼に逃した蚊の声に

廿日市市立廿日市中学校三年 長東 美稔

仏壇に林檎が香り祖父想う

呉市立川尻中学校三年 橋本 奈々

猫じゃらしガードレールに揺れている

福山市立新市中央中学校三年 松江 彩未

線香のほのかに香る帰省先

県立広島皆実高等学校二年 羽根 愛果

汗かいてペットボトルが軽くなる

県立三原高等学校二年 五阿味直斗

二百円握りしめ買うかき氷

県立三原高等学校二年 平田 樹生

夕立と家まで競走勝ってやる

県立三原高等学校二年 藤田 涼平

今は亡き母のにおいの藺座布団

県立千代田高等学校二年 服部 純平

砂浜を走り飛び込む海開き

呉市立呉高等学校三年 工 萌愛

## 一般の部

入賞

広島県知事賞

田水張る地球平らに千枚田

庄原市 永宗 敏昭

広島県議会議長賞

見守れる母もずぶぬれ水遊

福山市 世良 正子

広島県教育委員会賞

たばこ屋の早々しまふ夕河鹿

福山市 嶋山 洋子

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

水替への手に柔らかき金魚かな

呉市 宮首美代子

広島市長賞

黒い雨露の幾年経て勝訴

福山市 杉原 芳子

広島市議会議長賞

鉄板を張りしお城や天高し

福山市 高木佐和子

広島市教育委員会賞

継ぐ人の無き山畑へ大根蒔く

広島市 小都 妙子

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

鯉跳ねて空の高さを測りをり

広島市 山本 清司

川崎益太郎 選

特選

黒い雨露の幾年経て勝訴

福山市 杉原 芳子

【評】原爆投下後降ったという「黒い雨」。これも被爆と認定されるまでに要した年月。露の世と言われる時の流れを超えて掴んだ歴史的勝訴。

密ながら風通し良き秋桜

福山市 高橋 泰女

【評】新型コロナウイルスの収まらぬ中、密を避けることは必須。群れ咲くことが習性の秋桜であるが、換気は十分であるので、許されるという俳味溢れる句。

田水張る地球平らに千枚田

庄原市 永宗 敏昭

【評】千枚田に水を張ると、丸いはずの地球が平らに見えるという、普通の発想と逆の発想が面白い。

鯿跳ねて空の高さを測りをり

広島市 山本 清司

【評】 鯿の跳ねるのは、空の高さを測るためであるという面白い発想の句。

空蟬やたたみし命解き放つ

福山市 肥後 弘子

【評】 空蟬は、命を解き放った脱け殻であるという句だが、空蟬には、まだ命が残っているような感じを受ける。〈たたみし命〉が上手い。

入  
選

梅のなる里よとうとう無人駅

広島市 岡田 郁枝

春遠し母子が辿る国境

広島市 正山 史明

空を切るばかり五歳の捕虫網

福山市 折田 水峰

幼手に夢託したり桜貝

広島市 蒲池 正

菖蒲田や水のにほひを持ち帰り

福山市 瀬尾ちとみ

口喧嘩しつつも二人桜餅

呉市 手納 正康

病みて知る夫のつよさよ百日紅

福山市 林 すみ

残日の支へは俳句翁草

東広島市 伊藤 孝子

雲影をつよく搔きたるあめんぼう

福山市 横溝 和恵

石垣に城の余熱や河鹿鳴く

広島市 若宮 実

朝涼や式典を待つパイプ椅子

福山市 田村祐巳子

冷奴清き四つの角を持ち

尾道市 松井多嘉子

風立ちて一山揺らぐ芒かな

大竹市 二階堂穎二

水澄むや手術医のごと手を淨む

福山市 大塚 文枝

生身魂些事も大事もなきくらし

福山市 小林 加悦

ふるさとや休耕田の秋桜

広島市 久米 美枝

向日葵や争いやまぬ空の下

広島市 篠田 榮子

煩惱と仲良く暮らし古希の春

東広島市 香川不可止

久久や蝮の罅繁繁と

東広島市 佐々木房子

掃き出しぬ猫の土産の青蜥蜴

広島市 梶原美江子

木村里風子 選

特選

継ぐ人の無き山畑へ大根蒔く

広島市 小都 妙子

【評】農家の人不足を如実に、継ぐ人がいなければ自分ができることになる。農業が身に付いているのである。

見守れる母もずぶぬれ水遊

福山市 世良 正子

【評】水遊びに夢中の子の仲間に入った母親。子とよろこび合っている声が聞こえてくる。

酒蔵の裏に雁木や花菖蒲

安芸高田市 山下 和子

【評】酒蔵の裏は川であろう。雁木は船の発着場所で荷上げ、荷送りをす。豪商の酒造家におどろく。

夏休み言葉探しの旅に出る

広島市 寺澤 紀子

【評】言葉探しとは言い得て妙。地方には地方の訛がある。知識は豊富に得るためである。

返り打ちくらふ将棋や涼み台

広島市 徳毛 佳美

【評】将棋に熱が入っている。詰めまで迫ったが、どんでん返しに。くらふは悔しさである。

入  
選

螢火となりて戦死の祖父還る

庄原市 古家八千代

逝く秋の浜に朽ちたる捨小舟

福山市 戸原 澄清

会へぬまま野辺の送りや彼岸花

三次市 林 章子

草刈りや独り語りつ妻の墓地

広島市 坂下 人寿

梅雨さむや眠る二歳に蹴られたり

広島市 熊谷 純

幼手に夢託したり桜貝

広島市 蒲池 正

出格子に朝顔の蔓老舗宿

廿日市市 辻 恵風

コンバイン日本の秋を刈り取りぬ

福山市 岩元 剛

田水張る地球平らに千枚田

庄原市 永宗 敏昭

朝顔や空は静かに青くなる

広島市 下末かよ子

たばこ屋の早々しまふ夕河鹿

福山市 嶋山 洋子

乾涸びてなほ縋りをりかたつむり

尾道市 原田 道枝

父の顔知らで八十路の終戦日

広島市 松田 郁子

バス停は杉の丸太や青葉光

広島市 川本三栄子

水替への手に柔らかき金魚かな

呉市 宮首美代子

生と死の話の尽きぬ端居かな

東広島市 山田美佐子

秋澄むや雲のただよふ潦

呉市 大林 達郎

軒下の燕発ちゆく茜雲

広島市 松本壽賀子

初咲きの朝顔今朝の空の色

福山市 坂田 尚子

来賓の末席並ぶ花田牛

福山市 内田 千年

広川 良子 選

特  
選

田水張る地球平らに千枚田

庄原市 永宗 敏昭

【評】 広々と見渡す限りの千枚田に水が張られた。まさに地球が平らになった実感であろう。

鉄板を張りしお城や天高し

福山市 高木佐和子

【評】 築城四百年を祝い、令和の大普請の成った福山城の雄姿。鉄板張り  
は福山城の誇りである。

蟬しぐれ平和を告げてゐるやうな

山県郡安芸太田町 小西佐和子

【評】 うるさく聞こえるあの蟬の鳴き声も、平和な日本であるからこそ  
の、聞こえようである。

水替への手に柔らかき金魚かな

呉市 宮首美代子

【評】水を替えてやるとき一寸手に触った金魚の感触。思わず金魚の柔らかさにおどろいた作者。

たばこ屋の早々しまふ夕河鹿

福山市 嶋山 洋子

【評】めったに客も来ない田舎のたばこ屋が早々と店を閉じた。あたりに聞こえるのは河鹿の鳴き声だけ。鄙びた夕暮れ。

入  
選

見守れる母もずぶぬれ水遊

福山市 世良 正子

朝食の箸置き黙禱原爆忌

福山市 渡辺 素子

後継ぎの無き印判屋燕来る

広島市 藤谷 知子

風立ちて一山揺らぐ芒かな

大竹市 二階堂 穎二

目標は日に三千歩天高し

廿日市市 永野 昌人

白杖へ道を譲りぬ若葉風

広島市 煙石 博

口喧嘩しつつも二人桜餅

呉市 手納 正康

みちのくの旅偲ばるる鉄風鈴

福山市 小林 洋子

病室の窓額縁に虹仰ぐ

福山市 久保 紘子

ビル崩す重機唸るや走り梅雨

呉市 森 陽子

朝顔や空は静かに青くなる

広島市 下末かよ子

病みて知る夫のつよさよ百日紅

福山市 林 すみ

住職の茶色の作務衣茄子の花

広島市 本藤 玉江

万緑や校歌の山を主峰とし

広島市 森本 弘子

逝く秋の浜に朽ちたる捨小舟

福山市 戸原 澄清

宣言をもらさじと聞く原爆忌

福山市 朝日奈教子

朝顔や絵筆にのせて見たき色

福山市 箱田富久恵

ねこじやらしはぶてたる子をあやすかに

山県郡安芸太田町 浅田 洋子

原爆忌ひたすら願ふ平和かな

尾道市 日田 富恵

初咲きの朝顔今朝の空の色

福山市 坂田 尚子



# 現代詩

選  
者

八 橋 野  
木 本 上  
真 果 悅  
央 枝 生

# 小・中・高校生の部

入賞

広島県知事賞

手紙

あなたに  
手紙を書きたいと思う時  
わたしはひとつのインクなのです

くちびるから  
とめどなくあふれるインクをゆびでぬぐって  
そのままきゆうつとひっぱってゆく  
あなたのもとへとのびてゆく  
糸のようにたなびきながら、私に始まる色彩を  
風がやわらかに乾かして  
それをいくつもたばねたら

ああ言葉

県立広島高等学校三年 古田 弘珠

なんとか編んでみたんです

手紙

あなたのポストに、きっと似合うとおもうんです

眠るころには空っぽになりたい

私はまだ満ちたインクです

広島県議会議長賞

私へ私より

熊野町立熊野東中学校三年 鈴木 七歩

人の心を考えろと難しいことを  
簡単そうに言わないでくれ  
当たり前かのように言わないでくれ  
私

素直になれと  
解放してあげるみたいに言わないでくれ  
それができたらもうしてよ  
私

変わらないといけないなんて  
嫌なところばかりみて  
良いところは知らないふりなんてやめてくれ  
私

正解を追い求め  
私を追い詰める

私  
何が何だか分からない  
それでいいじゃないか

広島県教育委員会賞

修正テープ

ノートに書き間違いを見つけた  
ビー。

私はそこに修正テープを引く  
書き間違いは見えなくなった  
良かった、これで綺麗になった

また書き間違いを見つけた  
ビー、ビー。

だからまた修正テープを引く  
書き間違いは見えなくなった  
良かった、今度も綺麗になった

あ。

これも間違えてたみたい  
おかしいな、こっちも間違えてる  
そこもあそこも、そっちもこっちも  
あのときも

私のノートは間違いだらけ

県立広島中学校三年 二村 陽依

はやく、テープで直さなきゃ  
ビー、ビー、ビー、ビー、ビー……  
良かった、これで綺麗になった  
これで間違いはなくなった

あーあ。

また書き間違えちゃった

でも大丈夫

修正テープを引けば綺麗になるから

……

いつも通りにテープのフタを開けて

ビービー、び。

なのに

え。

ふとテープを引く手が止まった

なに、これ。

なんで今まで気づかなかつたんだろう

いつのまにか私のノートが

テープでいっぱいになっていたことに

間違えて間違えて間違えて間違えて間違えて  
修正して修正して修正して修正して修正して

綺麗になんて、なつてなかつたんだ  
だつて

ノートの白と修正テープの白は違うから  
間違いをいくらごまかしても  
なかつたことにはできないの

偽物の白と上書きした文字  
ほんとの私はどんなだっけ？  
ぺらり。

ページをめくつて裏から透かす  
そこにあるのは  
テープに隠されていた文字  
修正する前のほんとの姿  
そつと見てみたそれは

ああ、なんだ。  
今よりずつときれいじゃん。

現 代 詩 部 門

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

## 怪物

消しゴムが襲い掛かる

友達が消されていく

消しカスという涙を残して

新しくできた友達も

すぐに消しゴムの餌食

消しゴムは怪物だ

狙われてしまったら終わり

ぼくはただ願う

怪物がこっちに来ませんように

大竹市立玖波中学校二年 門田 七海

現 代 詩 部 門

広島市長賞

夏

額の汗を拭いながら自転車を漕ぐ

髪が 風が

暑苦しく纏わりつく

ペダルを踏み込む足が重い

熱気を孕んだ視線も怠い

目の前で色を変えた信号機に

内心悪態をつきながら

ただ 日に焦がされる

横を向いて 君に気づく

頬が 耳が

嫌でも赤く火照る

ハンドルを握る手が熱い

ピンっと反らした手が熱い

まだまだ色を変えない信号機に

県立広島皆実高等学校一年 成藤 万葉

内心感謝をしながら  
ただ 君に焦がれる

「おはよう」

横を向いた 君が気づく

息が 声が

ほんの少しだけ震える

口の中が乾く

君と絡む視線が 止まる

もうとつくに青色に変わった信号機を

横目に見て

君と一緒に走り出す

この夏は君に浮かされる

広島市議会議長賞

とりもどす

熱い熱い  
頭が熱い

何だか変

38度5分

やっぱりおかしいほくの体

これはきつと熱がある

のどが痛い 痛い 痛い

痛すぎて

水も飲めない

息もつらい

体もだるい 動けない

体のふしぶしが

ずきずきいたい

いたみがほくの体につきささる

スーパーマーケット

みんなの生活の場所

呉市立蒲刈小学校六年 重森 珀

みんなの 楽しみの場所

そこに そこに

一発のロケットだんが

つきささっていた

あそこには 何人の人の命と楽しみが

あそこには 何十何万の命の命と将来をつなぐ

食糧と夢や希望がつまった人生が

一しゅんにして失ったのだろう

ほくの体につきささった熱と痛みより

痛み以上の苦しみがある

ほくの体はほくの力で治せる

だから

ウクライナの平和は

ほくの力と

君の力と

みんなの力で

とりもどしたい

広島市教育委員会賞

SDGs

海の上で気持ちよさそうにただよう

ペットボトルに

ポテチのふくろ

そうざいの入れ物

カップラーメンの空き容器

どれもこれも

みんなが大好き

おかしや食べ物が入ってた

人がおいしく食べたその後

海の生き物にあげたのか

それとも容器が海へ旅に出たの？

海の生き物喜ばない

空き容器喜ばない

人がいやがることはダメ

お母さんは言うけれど

呉市立蒲刈小学校五年 石原 実織

もし

言ったら「ごめんなさい」と

あやまることって

教えられた

でも

人より長く生きる空き容器

いつになったらゆるしてもらえる

「ごめんなさい」

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

命の値段

お店に並ぶ

精肉コーナーの品物

一つ一つ値段がある

そこで私は疑問に思った

人の命はどんな大金でも

払えないぐらいの

価値があると教わった

だがしかしながら

肉には値段がある

三〇〇円台やら五〇〇円台

たまにはタイムセールも

どんどん安くなる肉

人々にとっては大変得だ

でも一方食肉達の気持ちは

まだ死にたくない 長生きしたい

恐怖を抱えた中だったのに

僕達の命はたったの一〇〇円単位

福山市立幸千中学校二年 藤原 美緒

高い値段もあるけれど  
僕らの命は値段のつけられる  
価値なんだと  
だから食肉に感謝するため  
いただきます という言葉がある  
皆さんしっかりと手を合わせ  
感謝を伝えましょう

—いただきます—

## 空の気持ち

はれの日の空はおだやかな人のようだ  
雨の日の空は悲しい人のようだ

くもりの日の空は人の心の迷いのようだ  
かみなりは怒っている人のようだ

人間に感情があるように空にも感情がある  
空はまるで百面相

大竹市立玖波中学校一年 藤原 来春

現 代 詩 部 門

曹達

ソーダを振った  
フタを開けると  
美しいほどの夏の思い出が  
飛び出してきた  
誰も知らない  
儂いほどの思い出が  
私の顔に飛び付いてきて  
思わず笑ってしまった  
何も知らずに  
開けてしまった  
無邪気な  
十歳の夏

福山市立幸千中学校一年 稲屋 綺良

現 代 詩 部 門

## いつも君と

目の前で見ると  
大きくほくに、おそいかかる  
長く生きて、  
ほくに何かを教える  
遠くにはなれていると  
ざわざわ  
バキバキ  
風の強さで  
ほくに何かを教えている  
森の中の君は  
どこにいるか分からない  
みどりを光らせ  
ほくに何かを教えている  
ほくは、  
いつも君を見ているよ

呉市立蒲刈小学校五年 木村 圭介

現 代 詩 部 門

# れきし

呉市立蒲刈小学校六年 岩崎 花音

卑弥呼

聖徳太子

小野妹子

中大兄皇子

中臣鎌足

聖武天皇

……

日本を作った人

こんなにたくさんいるんだ

一人一人の名前と一つの偉業

どれもこれも日本を作った人

うん？

安倍晋三

元内閣総理大臣だった

悲しい事に亡くなってしまったけれど

国葬になる

うん!!

安倍さんは総理大臣の時

安倍さんだけで仕事した？

いえいえ

岸田さんも……

外務省につとめる人も総務省財務省

はたまた税金を納めた人も

みんなが助けたから

思い通りの政治ができた

「歴史上の人物の名前をしっかりと覚えて」

って 先生は言うけれど

人物の名前の中に

その時代を生きたたきさんの人

たきさんの知恵をしぼって

助け合った結果が

人物の名前

時代を一生けん命生きた人々

ここにあり

## 痛いでしょ

福山市立城北中学校三年 渡壁 夏葵

哀しいでしょ 哀しいでしょ  
自分の笑顔の裏に誰かの涙が隠れていて  
涙を理解できないことが  
どうしようもなく 苦しいでしょ

痛いでしょ 痛いでしょ  
自分のやりたいことも  
『○○たい ××たい ーーたい』  
自分自身のことさえも  
『私は ボクは ジブンハ』  
何も分からなくなつて 怖いでしょ

寂しいでしょ 寂しいでしょ  
暗闇にひとりでいるくらいなら  
マリオネットでいるほうが  
ずっと楽だと気付いてしまつて  
こんな優しい歪さが

きつと  
似合っているん  
でしょ

## 僕が思う平和

県立西条特別支援学校高等部三年 久保 豪士

平和がなければ、  
僕たち障害者は、  
捨てられていたのかもしれない。  
平和でなければ、  
もつと格差が生まれていたのかもしれない。  
平和とは、  
お互いに話し合い、  
納得するまで話し合った結果。  
平和を表すのは、  
単純なようで、複雑なのかもしれない。  
平和とは、  
一言では言い表せない。  
十人いたら、十人の平和があるかもしれない。  
平和とは、  
はつきりと見えているようで、  
実は、霧のようにおぼろげなのかもしれない。

現 代 詩 部 門

## よくしゃべるおじさん

広島市立千田小学校三年 橋本 知春

熊野町きょう土館のおじさんは  
よくしゃべる

はつきり伝わり よくしゃべる

せつめい長いが おもしろい

おじさんは やさしいよ

ふでを持たせてもらったよ

でっかい でっかい

おもいもの

一人じゃ持てない 重いふで

太いという字を 書きたいな

二階に行く時

気をつけてと 何回も言ってくれた

よくしゃべる やさしいおじさん

金いろのいすも 見せてくれた

めずらしく

家につながっているくからも 見せてくれた

おみこしも 見せてくれた

よくしゃべるおじさんは

熊野を あいしているから

よくしゃべるんだなあ

さいごに のみものもらって

かえったよ

やさしくて よくしゃべるおじさん

これからも元気でいてください

また 行きます

# 一般の部

入賞

広島県知事賞

## 一握りの砂

庄原市 奥井 久子

「本川小学校の砂場の砂」  
父がぼそつと言う

藍染めの日本手拭の上に

一握りの砂があった

祖父母と父と母とわたし

仏間のテーブルの上の砂を囲んで座っている

祖母の呻くような泣き声を

ひぐらしの激しい鳴き声が消していた

「さわってあげて おばちゃんの骨」  
母が言った

おそろおそろ指で触れる

乾いてカサカサと碎けていく砂

白くてはかない粒  
なぜだか急に怖くなった  
指についた砂を 左手ではたいてしまった

キスター洋裁店

爆心地近くにあった叔母の店

かわいいフレアスカート・ブラウス

虹色のセロファンに包まれた飴菓子

おばちゃんは帰る度に

ヒロシマの街のあこがれをくれた

父は燃えさかるヒロシマに入り

何日も叔母を探し続けた

やっこのことで

本川小学校の砂場で焼かれたという情報

青い炎をあげて燃える死体の山

その砂場の端っこの砂を

父は持ち帰ってきたのだという

次の日の朝

おそるおそる仏間の戸を開けた

油紙と白い半紙が敷かれ その上に  
こんもりと砂は盛られていた

息をのんだ

朝の日射しの中で砂が光っていたのだ

昨夜見た砂ではなかった

白・黒・黄金・琥珀……

砂の一粒一粒が屈折率を持ち

乱反射し合っている

荘厳な砂の輝き

何百・何千の命が光っているように見えた

思わず手を合わせたわたし

あれから七十七年

わたしも年を重ねて 全てを忘れていく

でも 八月六日が来るたびに

あの輝く砂の光景は鮮やかに蘇る

叔母の墓の下に あの砂が眠っている

それを知っているのは わたしだけになった

父は第二次放射能でまもなく逝った

三十九才だった

叔母の墓と父の墓は  
並んでいる

広島県議会議長賞

小さな本立ての中で

世羅郡世羅町 高本 澄江

部屋の隅の小さな本立ての中で

その本はいつも私を待っていてくれるのです

—どうした どの花の声が聞きたいのだ—

何が悲しいのか寂しいのか

何に怒っているのか憎んでいるのか

心が揺らぎ頭がかっかした時

部屋の隅の小さな本立ての中で

その本はいつも私を待っていてくれるのです

星野富弘さんの詩画集達が

—前略—

しゃべりたくもない

野に咲く花のように

静かに一人でいたい

しかし腹がへった

残念だが

腹がへってしまった — 野に咲く花のように — より  
思わず笑ってしまったよ 星野さん  
水色のいぬのふぐりが黙って咲いていますね  
あなたの腹がへってしまった時

私だって

誰にも会いたくない  
しゃべりたくもない時があります  
野に咲く花のようにね

私の山畑でも 野に咲く花は

時に 私を励まし心安らかにしてくれ  
ます  
でも、でもです

野に咲く花は

たちまち雑草となり荒草となるのです  
そして私を打ちのめすのです

ほら見て下さい

この清らかで儂げな露草だつて

地を這い土を掴み伸び上がり  
びっくりするほど逞しい茎を延ばし

縦横に蔓延るのです

それは雑草なんです 荒草になるのです

この月見草だって  
こんなに堅くて太い茎になるのです  
鎌では刈れません  
草刈り機の馬力を全開にして  
防護目鏡を掛けて刈っていくのです  
私は農婦なのでから

種子を播き育てたコスモスだって  
鶏頭だって百日草、ひまわりだって  
抜き取り刈り捨て焼くのです  
秋の畑にするために

大根 白菜 広島菜 人参 蕪も播くのです  
そして 腹がへるのです  
残念ですが 野に咲く花にはなれません  
私は農婦ですから

さあ また あの小さな本立てに帰り  
静かに私を待っていて下さい  
私が寂しい詩人に返る 冬の日まで

現 代 詩 部 門

広島県教育委員会賞

開花支度

廿日市市 野田友里恵

初めてのバイト先で怒られた  
本当の責任の質量を知った瞬間だった

僕はずっと大人の皮を被った子供だった

見かけや周りの評価から

よくできた子だと

しっかりした子だと

責任感のある子だと

よく言われてきた

だから気づけなかった

いつの間にか周りは

綺麗な社会人のローブを羽織った

大人になっていたことに

僕の皮は向かい風に煽られて

破れ

剥がれ

飛ばされ

僕の幼い本質をさらけ出した

大きな世界を身勝手なフィルターにかけて

何の制限もない世界だと勘違いして

早くあの自由な世界に羽ばたきたいと

願っていた

願っていたのに

身勝手な幻想の世界など存在しないと

分かるはずだった

分かっていたはずだった

僕はあつという間に音を上げた

向かい風の世界から足を引つ込めた

抗うための力量は備わっているはずなのに

つい数ヶ月前だけど

ようやく成人になれたのに

どうもその向かい風に耐えられなくて

もう守られた世界にいられるのは

あと僅かしかないのに

嫌でも無条件に守られた世界から

出ていかないといけないのに

一面の花畑に隠された

無数の罨

僕らはそんな人生の中を歩いていく

いつか

いつかこんな僕でも

摘み取った花を片手に

足元の罨を避けながら

あの夕日は今日も綺麗だね、と

眩ける人生が描けますように

現 代 詩 部 門

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

## 波止の人影

三原市 末国 正志

ある著名な画家の「瀬戸内」と題された油彩画はこの画家の絶筆であるが

画像のみ残り実物は所在が知れない

ところが同じく「瀬戸内」の題を持つ

やや小ぶりな下絵は残っており

東京の瀟洒な美術館に収まっている

下絵と本画のただ一点の違いは

波止の先端にぼつりと佇む小さな人影

本画の方だけにそれがある

絵にこもる思いがそこから

淡い泉のように湧出し続ける

きつとその人影は波止先に佇んだ自身の姿…

本画「瀬戸内」の絵の具の乾くのも待たず

画家は急逝した

色彩の豊かさで知られた画家の

明治大正昭和にわたる画業は  
人影を描いた一筆の泳ぎでもって閉じられた

その二枚の絵「瀬戸内」は  
私の故郷の風景である

いわんや我が家の目の前の眺めである  
天の意は画家の最後の題材に

私の故郷の美しい眺めを与えたのだ  
だから波止先にぼつりと佇む人影は

画家が私の故郷を訪れた遠い日の  
私が生まれる以前の遠い日の

この町生まれの娘である若い日の母にも  
あるいは苦しい時代の壮年の祖母にも見えてくる

いや 絵の中に留められた時を超えて  
私がそこに立っているとさえ感じる

波止先に人影が見えない日はない

画家の最後の筆先の呼吸の中に  
日々の人影は

海に向かい佇んでいる

広島市長賞

金色の折鶴のうた

ゆりかごを求めて

鳥は飛翔し

人々はうたを紡いでゆく

ある春の日に

原爆の子の像はスズメの家となり

鐘はスズメのゆりかごとなった

人々は鐘の鎖をそつとはずして

選択を信じ

うたを紡いだ

鐘はかすかに揺れて

金色の折鶴も一緒にくたつた

すべてのいのちは抱かれて

生まれ育ってゆく

広島市  
松尾  
如華

スズメの子らは

金色の折鶴に小さな羽をやすめて  
風と鐘と折鶴と一緒にうたった

ゆりかごのうたを抱いている

この世界を

折鶴は守りつづけて

静かな春に

原爆の子の像はいのちの家となり

鐘はいのちのゆりかごとなった

巣立ちを終えたゆりかごには

孵ることのなかつたうたが

静かに眠り続けており

人々の手に抱かれて

大地のゆりかごへと還っていった

人々は鐘の鎖をそつともどして

鐘を鳴らし

風と鐘と折鶴と一緒にうたった

鳥はうたい

人々はうたい

うたは世界へと飛翔する

あの日を記憶する少女は

沈黙のまま

人々の選択を信じて

金色の折鶴を空に捧げている

現 代 詩 部 門

広島市議会議長賞

雨恋い

傘を差すと雨が降る  
傘のなかに雨が降る  
震えるように冷めたその隙間に  
いつかのあなたを見るために

どうしようもないような僕の人生に  
たったひとつ色づいたあなただけ  
どうか忘れないように、今日も泣こう

花が落ちるその様に  
泣きたいほどに焦がれた  
ただだからだと延ばした寿命が  
今もひたすらに疎ましい

どうしようもないような僕の人生を  
そっと優しく掬ったあなただけ  
どうかこぼさないように、夜を待とう

広島市 佐々木あお

いつか傘のなかに降った雨が  
沈むような水溜まりをつくって  
溺れていくその息苦しきは  
きつと胸に優しいから  
だから、僕は傘を開いて雨を待つ  
あなたを、待っている

傘を差すと雨が降る  
傘のなかに雨が降る  
あなたの居ない褪せたこの世界で  
いつかのあなたに会うために

広島市教育委員会賞

私から私へ向けて

三次市 藤谷 静香

私は私の性格をほとほと持て余しており、三つ子の魂と申しましょうか物心ついた頃にはすでに私の腹の中に住んでおりました。この子のおかげで私は、いぶん不自由な思いをしてきました。弱いくせに自尊心が強くわがままなのです。利かん気でおよそ人好きのしない子なのです。何度も追い出そうとするのですが根を張ったように動こうとしません。理を尽して言い聞かせるのですが情けないくらいに聞き分けがなのです。

この子には世間にそぐわない所があります。私はこの子のことを世間に気付かれるのではないかと、いつも戦戦恐恐としておるような次第なのです。

私はこの子を克服してこの子から自由になりたいのです。

困ったものですね。

ありがとう。分かっていただけですか。

いえいえ困ったのはあなたの方ですよ。克服されるべきわがままは見えても、克服しようとする側のわがままはなかなか見えにくいものなのです。あなたはあなたの思うがままにその子を変えようとしてはいませんか。

向上心や信念や理想という言葉をむやみに使つてはいけません。傲慢な自尊心を隠し持っていることがしばしばあるからです。現実を強引に支配し操ろうとしがちだからです。

あなたはあなたの作品ではありません。あなたはあなたに即して生活していかなければなりません。自尊心とともに小高い丘からあなたを見下ろす理想はみじめなあなたと一緒に歩きたがりません。ほんとうにあなたを導く言葉は、時には強く命令しながらあなたとともに歩く言葉です。まず一歩です。蟻の一歩です。蟻の一歩でいいというのではありません。蟻の一步こそ一歩なのです。根拠に支え

られた一步はありません。論理は後から付いて来る性質のものなのです。

その子がどんな子であろうと、あなたはその子を見放してはなりません。拒んではいけません。あなたに許されなければその子はいつまでたつてもあなたにとって厄介者であり続けるでしょう。あなたに見捨てられたその子はおどおどしながらどんなに悲しい思いで世間をさまようことでしょう。あなたがその子をそのまま許さなければあなたの居場所はどこにもありません。

支配することによって得られる自由は空虚なものです。許すことによって生まれる自由は生きています。人を、自分を、許し愛し、ひがまず怒らず、一日一日を過ごしていきましよう。

現 代 詩 部 門

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

想い

どれだけ傷ついてもいい  
私はあなたを守り続けるよ

あなたと出会ったあの日から  
何度共に歩んだかな

晴れの日も雨の日も、あなたと一緒にだったから  
私は強くなれたと思うんだ

たまにあなたが他の子といるのを見ると  
まだまだ嫉妬しちゃうけど

また私と一緒にいることを選ぶあなたから  
結局離れられないんだ

ずるい人だな  
そんな所も大好きなんだ

広島市 佐々木瑠音

どんなに険しい道のりも  
あなたとなら乗り越えてゆけるでしょう

これは私の気持ちを綴った  
あなたへの詩

靴の私が伝えられるはずないけど

草を抜く

広島市 大澤 優子

滴る汗が草の露となる炎天下  
ただ無心に草を抜く

激しい雨に打たれ  
根を張り巡らせた草ぐさは  
輝く緑の剣となり  
命燃やして天を仰ぐ

―美しく匂うこの草ぐさが  
―地球のどこかで今このとき  
飢えて死にゆく子どもらの  
糧に姿を変えないだろうか―

大地と交わす言葉は  
途方もなく虚しく

雲となりて空に散る

草を抜くしかできぬ私の  
せいいっぱいの声の  
悲しいほどの小ささよ  
何の力も持たずして  
草とのみ対峙し続ける

戦<sup>いくさ</sup>の血に濡れる草  
倒れた兵士が最期に見る  
ひと握りの夢

それはやがて  
果てしない地の底に吸い込まれ  
誰の胸にも届くことはない

静かな祈りを込めて  
私はひとり  
ただ草を抜く

## 海上

広島市 服本 吞

大きな海が寝そべるこの世界で、  
ボクは小さなボートの上で生まれた。

生まれてからのほぼ全てを、

ボクはこの木製の家の中で過ごしてきた。

パパは毎日釣りのお仕事をして、

ママは毎日ボクのお世話をしてくれた。

ママの話によると、世界のどこかにはリクと

いう大きな舟があつて、ヤマという大きな帆

にカワという大きな割れ目がついているそうだ。

ボクにはよく分からなかった。

大人のママにもよく分からないみたいだった。

けれども海のことなんでも知っていた。

ボクよりずっとずっと大きいこと、

沢山のお魚が海の中で生活していること。

どうしてボクらにはヒレやエラがないの。

どうしてボクらだけ海の上で生きているの。

パパがボクの頭をゴシゴシなでる。

きつとパパにも分からないんだろう。  
パパの大きな手で前がふさがれて、  
パパの表情は見えなかった。

月がたくさん回って

ボクもずいぶんと大きくなった。

最近パパがもう一つ

新しいボートを作ってくれている。

これが完成すれば、

ボクはひとりで生きなきゃいけない。

二人と暮らすには

ボクは大きくなりすぎたみたいだ。

通りすがりのおじいさんが、

おしゃべりな人で色々話をしてくれた。

きつと一人で退屈なんだろう、ボクもそうだ。

でもおじいさんはバカなことばかり言う。

リクなんて幻だ

ボクらの人生なんてくだらない

そこでボクはおじいさんに別れを告げ、

その幻を探す旅に出た。

この果てしない海の上に浮かぶ、大きな舟。  
ボクは今もリクを探して旅を続けている。  
この旅でひとつ確信したことは、  
やっぱりあの人はウソつきだったこと。  
海を渡るごとにボクは新しい体験をした。  
その度にボクの胸は高まって、  
自分が前よりも大きくなつたような気がする。  
今まで当たり前だと思つてきたことが、  
当たり前前じゃないことなんて何度もあつた。  
今までまつたく知らなかつたことと、  
出会つては思い出が溜まつていく。  
だから進め、もつとすすめ、  
小さなオンボロボート。  
ボクの夢のために。

現 代 詩 部 門

あのごろのごころのきろく

安芸郡海田町  
竹野内康子

私は十歳、

きつと

初めての恋をした

それは

心の奥に棲みついた

ほのかに温かい

小さな種

「おはよう」

涼しい声は

早春の風に乗って

私を追い抜かず

自転車をこぐ

赤いソックスの

後ろ姿に驚かされた

中学の卒業式の朝

私は十六歳、  
古めかしい木造校舎の  
廊下や踊り場で  
新しい人らの  
眩しく、美しい光景に  
出会った  
心はとらわれ、魅せられ、傷ついて  
きらめく波間に揺蕩った  
幾度も 幾度も

私は二十歳、  
ミニスカートで街を歩き  
すり鉢状の広い教室で  
長い講義を聴いていた  
無精髭らが  
くわえ煙草で  
文学論を戦わせる  
雑然とした部室、  
私はひとり  
十代の純情を  
大学ノートに書き留めていた

三十三歳、

懐かしい顔の集まる

宴の夜

廊下で出くわした

赤いソックスのその人が

初恋は君だったと

告げる瞬間

うずもれていた

小さな種は

戸惑いながら

静かに、昇華した

そして今

六十八の私がつづる

瑞々しく、儂い

あのころのころのきろく

現 代 詩 部 門

## あばれトマト

廿日市市 和崎くみ子

姉がトマトをどっさり持ってきた  
できすぎたトマトをもらつたと  
皮はかたいよ

店で買うものは商品で  
しっかり管理されたもの  
家庭菜園はそうはいかない  
季節のものが一度に連なり  
持て余すほどできたり

不揃いでワンパクなトマトが  
袋からころがりでてきた  
たっぷりと陽と風と土を吸いこんで  
育ちすぎたのが すじばったのが  
一目でわかる

ハウレンソウばかり

ハクサイ ダイコン ジャガイモばかり  
そんなおかずの日もあったな  
裏の畑では毎日食べても残る野菜が育ち  
家の中では反抗期にむかう子ども達が育ち  
賑やかだった

普段着で 手加減なしに  
畑で存分にあばれたトマト  
すっぱくて 甘い  
かたくて じゅくじゅく  
夏を遊びきった頃の まま

帰りたいところがあるとしたら  
そんな日照りの中  
あふれるほどあった元気  
予測不能な成長期  
そんなトマトの赤い実の中



# 川 柳

選者

(小・中学生の部)

田 辺 与志魚

(高校生・一般の部)

鴨 田 昭 紀

弘 兼 秀 子

## 小・中学生の部

### 入賞

広島県知事賞

しょうらいはいっぱいあつてまようんだ

廿日市市立佐方小学校二年 完田 澄佳

広島県議会議長賞

明日はね一人一人にあるんだよ

廿日市市立佐方小学校六年 早川 旭

広島県教育委員会賞

明日にはノーゲームからぬけ出せる

大竹市立小方小学校四年 船原 望愛

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

明日はね今とはちがうぼくになる

大竹市立小方小学校六年 澄川 碧

広島市長賞

あこがれる先ぱいになる明日見える

大竹市立大竹小学校四年 安田 篤史

広島市議会議長賞

明日のため花をとじてるタンポポだ

廿日市市立佐方小学校四年 極楽寺悠大

広島市教育委員会賞

あしたにはきょうの自分とさよならだ

大竹市立大竹小学校四年 舛本 蒼汰

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

サッカーれんしゅうあしたのじぶんになイスパス

庄原市立東小学校一年 佐々木琢矢

題「明日」

田辺与志魚 選

特  
選

しょうらいはいっぱいあつてまようんだ

廿日市市立佐方小学校二年 完田 澄佳

【評】まだまだ将来はやりたいことや行きたい所がいっぱいある。時間もたっぷりのあれもこれもこれにも頼もしいエネルギー。

明日はね一人一人にあるんだよ

廿日市市立佐方小学校六年 早川 旭

【評】明日という夢を見る場所の大切さとそれは自分だけのものでもない事に気付いたのがすごい。一人一人にかけがえのない明日です。

明日にはノーゲームからぬけ出せる

大竹市立小方小学校四年 船原 望愛

【評】なんらかの理由で仲間との交流（ゲーム）に遠ざかっていた作者の意識の変化が強い決心として見てとれる。

明日はね今とはちがうぼくなる

大竹市立小方小学校六年 澄川 碧

【評】昨日と同じように今日が始まる当たり前の中にこのぼくは昨日とはちがう自分を感じている。一枚の脱皮だろうか。

あこがれる先ぱいになる明日見える

大竹市立大竹小学校四年 安田 篤史

【評】こころ密かに憧れる先輩の姿を胸にやきつけた。明日からの自分の姿をはっきりと目標に描くことができた。

明日のため花をとじてるタンポポだ

廿日市市立佐方小学校四年 極楽寺悠大

あしたにはきょうの自分とさよならだ

大竹市立大竹小学校四年 舛本 蒼汰

サッカーれんしゅうあしたのじぶんにナイスパス 庄原市立東小学校一年 佐々木琢矢

夜にはね明日の自分にバトンパス

廿日市市立宮園小学校六年 内藤さくら

また明日学校じゅうをひびかせる

大竹市立小方小学校五年 新畑 眞央

あしたにはマスクはずしてわらいたい

大竹市立大竹小学校二年 橋本 奏音

しゃべり合い友達になり明日になる

大竹市立大竹小学校五年 国兼 蓮

明日には今日の後かいなくすんだ

廿日市市立宮園小学校五年 奥 聡大

わくわくで明日のごはんを聞いたんだ

大竹市立小方小学校六年 濱本 百合

明日にははなまる1つつきたいな

大竹市立玖波小学校三年 星野まなみ

明日の自分今の自分と比べっこ

大竹市立大竹小学校五年 今橋 春向

ガッツポーズ明日のご飯はハンバーグ

廿日市市立佐方小学校六年 高井 胡桃

宿題を明日へ明日へとためていく

大竹市立小方小学校六年 濱田 圭佑

夕方はオレンジいろの明日だよ

大竹市立大竹小学校四年 安村 優馬

今日おわり明日がくるのは風のように

大竹市立大竹小学校六年 佐多そよか

分からないだから明日にまかせよう

廿日市市立佐方小学校五年 梅田 航平

打ってやる明日はかならずホームラン

大竹市立大竹小学校三年 小島 優愛

また明日こうふくばかりハイタッチ

大竹市立小方小学校三年 池上 明華

うぐいすがさくらのうえでさいている

大竹市立大竹小学校四年 藤野 瑞季

あしたはねプールのゆかがマグマだよ

廿日市市立宮園小学校二年 樋口 小羽

あしたこそせかいへいわがはじまって

廿日市市立宮園小学校二年 山本 茉央

ともだちにありがとうって言われたよ

廿日市市立佐方小学校二年 いけ上大と

ぼくは今明日への橋をわたってる

大竹市立小方小学校六年 大村 啓人

明日には何かの声が聞こえそう

廿日市市立佐方小学校四年 加藤 汐葉

明日になるそうすればまたかべがある

廿日市市立佐方小学校三年 堀江 楓乃

「明日する」ぜったいしないせんげんだ

廿日市市立宮園小学校六年 福田 葉琉

仲直りちゃんと明日にあやまろう

大竹市立大竹小学校六年 中川 美緒

明日へとのびるかいだんかけ上がる

廿日市市立佐方小学校六年 原田 悠生

空を見て未来の自分考える

大竹市立大竹小学校五年 村井 奏介

時間はねチクタク進む明日へと

廿日市市立佐方小学校六年 北原 香純

川 柳 部 門

## 高校生・一般の部

入賞

広島県知事賞

許し合う日はきつと来るちぎれ雲

広島市 高東八千代

広島県議会議長賞

山折りも谷折りもあり終着地

東広島市 寺内由美子

広島県教育委員会賞

平凡に生きて時々雲を見る

広島市 羽城裕子

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

一瞬の沈黙本音が聞こえる

広島市 豊田佳子

広島市長賞

休止符をどこで打とうか流れ雲

広島市 大杉 卓雄

広島市議会議長賞

古典読む心が満ちる秋の夜

福山市 新庄 芳春

広島市教育委員会賞

やさしさの種こぼれまた命生む

呉市 荒新 悠子

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

ちぎれ雲独り立ちする時がきた

福山市 早川 迷子

題「雲」

鴨田 昭紀 選

特選

許し合う日はきつと来るちぎれ雲

広島市 高東八千代

【評】誤解や意見の食い違いなどから溝が出来てしまったのだろうか。人間関係の複雑さをいろいろ想像させる。

平凡に生きて時々雲を見る

広島市 羽城 裕子

【評】平凡な生き方こそが最も難しく、そして一番幸せなのではないだろうか。平易な句ながら人生の機微を感じさせる。

休止符をどこで打とうか流れ雲

広島市 大杉 卓雄

【評】順風満帆な時こそ一度は立ち止まり振り返ってみることも必要。そして反省も踏まえて再出発することだ。

ちぎれ雲独り立ちする時がきた

福山市 早川 迷子

【評】今までは親の脛をかじっていたが、何時かは独り立ちをしなければいけない。一人前への自覚と決断に拍手。

青空へいたずら書きの雲ひとつ

広島市 近末 夕子

【評】青空をキャンバスに雲がいたずら書きをしているという。ほのぼのとしたメルヘンの世界が目には浮かぶ。

入 選

流れ雲もう生家には帰らない

江田島市 住田 照水

巢立ちの子遠く見ている千切れ雲

福山市 村田 幸夫

風まかせ雲に境界線はない

広島市 福田 淳子

淋しくて雲を相手に独り言

広島市 川上 咲良

富士登頂雲が称える喜寿の脚

呉市 熊川 勝彦

予備校の窓にはすでに鰯雲

広島市 豊田 芳香

真っ白な雲は戦を許さない

三原市 笹重 耕三

雲行きがあやしい今は語るまい

庄原市 荒木美智子

物干しが雲の機嫌を聞いている

東広島市 岡田千賀子

広島をヒロシマにしたきのこ雲

広島市 吉村 充

引き際は風にまかせるちぎれ雲

広島市 常國 喜好

雨雲の行方気になる初デート

尾道市 東 一夫

雲隠れすれど尻尾が見えている

尾道市 川口 靖文

青春の恋は浮雲流れ雲

広島市 森崎八重子

気分屋の雲のかたちは君みたい

県立呉宮原高等学校二年 橋本 愛奈

雲上の人と承知も好きは好き

廿日市市 藤井 紫乃

雲の間に光一筋明日が見え

大竹市 浅田 華蓮

仲間からとり残された雲ひとつ

広島市 谷本 友

雨雲だてるてる坊主作らなきや

県立呉宮原高等学校二年 佐々木柚奈

恋をした少女ふわふわ雲に乗る

広島市 周藤 悠奈

題「自由吟」

弘兼 秀子

選

特  
選

山折りも谷折りもあり終着地

東広島市 寺内由美子

【評】人の一生にある出来事を「山折り谷折り」と表現し、説得力を持つ。喜びも悲しみも今は達観した境地だ。

一瞬の沈黙本音が聞こえる

広島市 豊田 佳子

【評】ある事を抱えていて、ズバリと問われた場面だ。苦しい胸の内を「沈黙」に込め、声なき本音を聞く。

古典読む心が満ちる秋の夜

福山市 新庄 芳春

【評】時は正に芸術の秋だ。古典を紐解きその奥深さ、美しさに触れた。崇高な世界に魅了された格調高い句だ。

やさしさの種こぼれまた命生む

呉市 荒新 悠子

【評】人のやさしさのリレーが、自然の摂理と共に描かれ、希望の句と  
なった。平和の原点を世界に届けたい句だ。

ひたすらに精進をして今日眠る

福山市 石井小魚二

【評】ひたすらに心を打ち込み励む日々を送っている。高ぶった疲れには  
充実感がある。心地良い眠りに落ちた。

紆余曲折流れた果ての現在地

広島市 大杉 卓雄

老介護次の宿題待つ覚悟

江田島市 住田 照水

朱の筆にたつぷり未来ふくませる

廿日市市 迫本 苑子

何もかも繋がっている綾なして

広島市 米田 恵子

二幕目を一緒に生きる後遺症

江田島市 問可 圧子

悔いだけは残したくないシャボン玉

広島市 常國 喜好

励ましの声に明日へ向く一歩

呉市 山本 檀

ふる里に安寧の場がある山河

廿日市市 石川 ゆう

ローカルの線路昭和を乗せて消え

広島市 原 幽貴

約束を果たせぬままの墓まいり

福山市 早川 迷子

ロシア語を翻訳できぬ恐怖心

広島市 小西 博子

蔓草のからむ空家の錠堅し

三次市 林 勝子

太陽が転がっている炎天下

広島市 羽城 裕子

花火背に福山城の晴れ姿

福山市 坂本 信子

表情筋次の言葉を弾ませる

広島市 川本 敏雪

仕合わせは自分らしさで居れる場所

尾道市 小川 道子

元気だと風の便りに乗せてみる

東広島市 岡田千賀子

老い二人風を求めて瀬戸暮らし

竹原市 室 晃二

無名にも七十年のドラマ有り

呉市 熊川 勝彦

もがいても必ず明日はやってくる

県立呉宮原高等学校二年 田中 莉乃

# 作品募集要項

## ■趣旨

文芸に親しむ人々から広く作品を募集し、発表、交流の機会を設けることで、文芸への理解を深め、広島県の文化を高める祭典とします。また、表彰式・分野会を行います。

## ■主催

けんみん文化祭ひろしま実行委員会、公益財団法人ひろしま文化振興財団

## ■事業内容

応募のあった作品について審査を行い、入賞作品等を決定し、表彰します。

## ■応募締切

令和4(2022)年9月7日(水) 必着

## ■応募資格

広島県内に在住している人、通勤、通学している人及び広島県出身者

## ■応募先・問い合わせ先

【郵送】

〒730-0051 広島市中区大手町一丁目5-3 広島県民文化センター内  
公益財団法人ひろしま文化振興財団

## ■賞

短歌、俳句、現代詩、川柳の分野ごとに広島県知事賞・広島県議会議長賞・広島県教育委員会賞・けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞等を授与します。

## ■表彰式・分野会

日時：令和4(2022)年12月11日(日) 午後1時00分

場所：広島県民文化センター（広島市中区大手町一丁目5-3）

## ■作品集

短歌、俳句、現代詩、川柳の入賞作品等を掲載した作品集を刊行し、表彰式会場にて無料配布しますが、郵送を希望される場合は、郵便番号・住所・氏名を明記し、215円切手を貼付した返信用封筒（横19 $\frac{1}{2}$ ×縦24 $\frac{1}{2}$ ）を応募先に郵送してください。

なお、応募された作品の著作権は、けんみん文化祭ひろしま実行委員会に帰属します。※全応募作品を掲載した作品集は作成しません。

## 短歌 応募規定

### ●募集区分

一般の部 小・中・高校生の部

### ●作品

未発表作品とし、一人一首とします。（応募作品はお返ししません。）

### ●応募方法

所定の応募用紙に黒のペンかボールペンで、**楷書**で必要事項を記入のうえ、応募してください。

### ●その他

応募規定に違反する場合及び盗用・類似作品と認められた作品は、入賞等を取り消します。

共 催： 広島県歌人協会

## 俳句 応募規定

### ●募集区分

一般の部 小・中・高校生の部

### ●作品

未発表作品とし、一人一句とします。（応募作品はお返ししません。）

### ●応募方法

所定の応募用紙に黒のペンかボールペンで、**楷書**で必要事項を記入のうえ、応募してください。

### ●その他

応募規定に違反する場合及び盗用・類句と認められた作品は、入賞等を取り消します。

共 催：(公社)日本伝統俳句協会 (公社)俳人協会広島県支部 広島県現代俳句協会

## 現代詩 応募規定

### ●募集区分

一般の部 小・中・高校生の部

### ●作品

未発表作品とし、一人一編とします。（応募作品はお返ししません。）

### ●応募方法

所定の応募用紙、または原稿用紙に黒のペンかボールペンで、**楷書**で必要事項を記入のうえ、応募してください。本文は、原稿用紙3枚以内とします。

### ●その他

同一作品及び類似作品による他の文芸事業への重複応募はお断りします。応募規定に違反する場合は、入賞等を取り消します。

共 催： 広島県詩人協会

## 川柳 応募規定

### ●募集区分

高校生・一般の部 小・中学生の部

### ●作品

未発表作品とし、一人各題二句詠とします。（応募作品はお返ししません）

### ●応募方法

所定の応募用紙に黒のペンかボールペンで、**楷書**で必要事項を記入のうえ、応募してください。

### ●その他

応募規定に違反する場合及び盗用・暗号句と認められた作品は、入賞等を取り消します。

共 催： 広島県川柳協会

けんみん文化祭ひろしま'22 文芸祭 応募状況

地区	市町	短歌		俳句		現代詩		川柳	
		一般	小・中・高	一般	小・中・高	一般	小・中・高	高校・一般	小・中
広島	広島市	72	486	116	467	23	11	111	5
西部	大竹市	0	0	1	11	0	15	5	805
	廿日市市	6	291	8	922	4	0	15	687
呉・安芸	呉市	18	333	20	239	0	17	71	0
	江田島市	1	0	1	6	1	0	3	3
	府中町	1	43	5	1,210	1	0	2	0
	海田町	1	49	0	278	1	50	0	0
	熊野町	0	0	0	0	0	13	0	0
	坂町	0	0	0	244	0	0	0	0
東広島	東広島市	7	5	11	304	3	6	18	2
芸北	安芸高田市	6	20	2	51	0	14	0	0
	安芸太田町	1	0	5	0	0	0	0	0
	北広島町	1	26	0	26	0	0	0	0
尾三	竹原市	4	0	4	0	0	0	8	0
	三原市	9	242	3	238	4	0	3	0
	尾道市	15	131	15	180	2	2	15	0
	大崎上島町	1	0	1	27	0	0	0	0
	世羅町	1	0	0	0	2	0	0	0
福山	福山市	20	403	60	774	3	186	32	4
	府中市	1	30	3	0	0	0	9	0
	神石高原町	0	0	0	14	0	0	0	0
備北	三次市	12	267	13	23	2	3	14	0
	庄原市	8	199	6	128	1	0	4	71
県内小計		185	2,525	274	5,142	0	0	310	1,577
県外		0	0	0	0	0	0	0	0
合計		185	2,525	274	5,142	47	317	310	1,577

## けんみん文化祭ひろしま'22 文芸祭 大会記録

- 【開催日】 令和4年12月11日（日）
- 【場所】 広島県民文化センター
- 【主催】 けんみん文化祭ひろしま実行委員会、公益財団法人ひろしま文化振興財団
- 【共催】 広島県歌人協会、(公社)日本伝統俳句協会、(公社)俳人協会広島県支部、広島県現代俳句協会、広島県詩人協会、広島県川柳協会

### 【プログラム】（予定）

- 表彰式（13：00～13：30）  
入賞作品の発表・表彰式 等
- 合同分野会（13：45～15：00）  
4分野（短歌、俳句、現代詩、川柳）  
各分野の選者による講評 等

けんみん文化祭ひろしま'22 文芸祭 合同作品集

編集・発行 令和4年12月

けんみん文化祭ひろしま実行委員会  
〒730-8511 広島市中区基町10-52  
広島県環境県民局文化芸術課内  
TEL(082)513-2722

公益財団法人ひろしま文化振興財団  
〒730-0051 広島市中区大手町1-5-3  
広島県民文化センター内  
TEL(082)249-8385

印刷 株式会社中本店